



ジュネジャ レカ

LEKH Juneja

ロート製薬
副社長、CHO

健康を経営の根幹に、 社員一人ひとりの健康から 関西を元気に



私は、2014年に日本で初めてのCHO(チーフヘルスオフィサー=最高健康責任者)に就任して以来、社員自らが健康増進に取り組む風土づくりに努めてきました。これは、経営層からの押しつけではなく、社員が自分のために必要だと理解して取り組みを実践するきっかけをつくることが大切だと考えているからです。製薬会社である当社の軸は健康にあります。真の「健康」とは、ただ病気にならないということではなく、やりがい・生きがいなど精神面も含め、心身ともに健やかであることです。そのためには、職場の雰囲気も重要であり、毎朝社員が、会社で仕事がしたいと思えるような、やりがいあふれるオフィスをめざしています。そして、正しい生活習慣のもとスポーツも楽しみ、体に良い食事を取る。それが個人の健康、さらには生き生きとした働き方の実現にもつながり、正のスパイラルを生み出すことになります。

全社員が健康であることは、当社にとって最高の財産です。その実現をめざし、健康経営とは何かを有志の社員と議論したり、社内からアイデアを集めて数々のプロジェクトを実施したりしてきました。スポーツを推奨するために、約30年前から実施している全社員運動会に加え、全社員に活動量計を配布して日々の歩数を個人・チームで競う「とこチャレ」や禁煙を目的とした「卒煙ダービー」など、楽しみながら健康づくりを実践するさまざまなかきっかけを提供しています。

「人を良くする」と書くように、食は健康の重要な要素です。社内で調査すると、朝食を取らない社員が多いことがわかりました。そこで、会社で朝食を食べてもらうプログラムを実施したところ、便通が良くなったり、肌の調子が良くなったり、元気が出たなど社員自身がその効果を実感するようになりました。また、健康づくりの一環として健康教育にも力を入れています。



ここにも私たちの一つの思いがあります。例えば、昨今、日本の女性は、BMI18以下の痩せ型を望む傾向にあります。痩せすぎで栄養が偏った妊婦からは、2,500g以下の新生児が生まれる可能性が高くなります。そうした新生児は将来的に生活習慣病にかかるリスクが高いことがわかっています。健康教育を通じて、こうしたこともしっかりと伝えたいと考えています。

日本では、健康寿命と平均寿命の差が広がっていることも問題となっています。この差を縮めるために、まずは当社の社員から取り組みを始めることで、社員の家族、そして社会全体へとその輪を広げていきたいと考えています。

昨年スポーツ庁より「スポーツエールカンパニー」に認定されたことを受け、当社ではスポーツ支援により一層力を入れています。子ども向けの特製の卓球台を幼稚園や小学校に寄贈したり、ガンバ大阪のオフィシャルスポンサーとなっこことなどはその一例です。こうした取り組みが、社員の「スポーツをやろう」という意識の醸成にもつながっています。

大阪府は全国的にみても健康寿命が短い地域です。当社では大阪府と包括連携協定を締結し、食やスポーツに関するサポートを行っています。人生100年時代を見すえ、健康寿命をのばしていくためには、多くの市民が毎日少しでも「スポーツをする」ことが大切です。来年から始まるゴールデン・スポーツイヤーズはすばらしいタイミングです。企業や関連、そして行政が一体となり国際的なスポーツイベントを生かしながら、スポーツを楽しもうという雰囲気づくりに取り組んでいきたいと思います。

(談)